

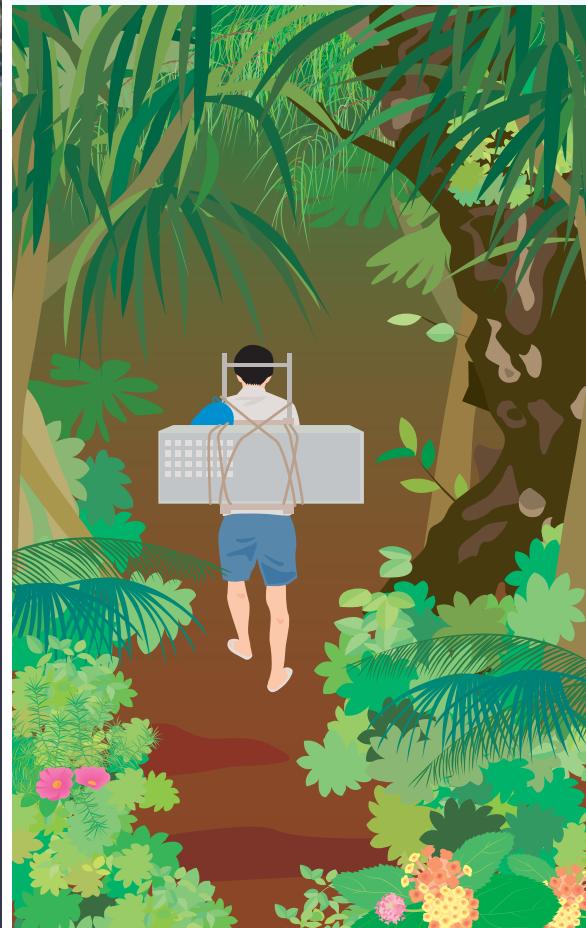


ぱしり！

大きな音がして入り口の戸が閉まり
ネコは檻の中に閉じ込められました

ネコはわけがわからず
やたらめったら転がり、もがき、ひっかき
けりました
鼻からも爪からも血が流れましたが
痛いとも思わず、恐ろしさにつつまれていました

朝が来て
人間がやってきて
ネコを檻ごと背負い港へ運びました
船に乗り、陸に上がりました
父島です
また船に乗りました



夜が来て、朝が来て、建物だらけの騒々しい場所に着きました
東京の町でした
ネコは疲れに疲れて気が遠くなりました



「マイケル、マイケル」女人の声が聞こえます
「マイケル、起きたの」「マイケル、ごはんよ」



どうやら「マイケル」というのが
ネコの名前のようにです

マイケルはどうぶつ病院のケージの中に
いました

マイケルと呼ばれることにも慣れました
人間にさわられると
ビクリとこわばっていた体も
今は顎の下をなでられると
母ネコになめてもらった
幼い頃を思い出します

食べ物を探して一日中ほつつき歩く暮らし
暑い日差しに焦がされ続ける暮らし
水たまりを見つけた時だけ
乾いた喉を潤すことのできる暮らし
名前のない暮らし

そのすべての暮らしと別れ
マイケルは人間に飼われることも悪くないと
感じはじめています





島ネコたちのその後

マイケルの後も母島南崎からネコは引っ越ししてきました。そして、父島からも。

小笠原諸島には、アカガシラカラスバトという、世界でここにしかいないハトが生息しています。地上に巣をつくることが多く、地面を歩いて餌を探るこのハトたちが、ネコの影響を受け、数を減らしている恐れがあります。そこで、ハトの父島での繁殖地、東平でもネコの捕獲が始まりました。

父島、母島のネコたちは、東京の動物病院にやって来た時、ほぼ全頭、お腹に寄生虫がたくさんいて、痩せていました。皮膚炎を起こしていたり、糖尿病であることが分ったネコもいます。島ネコたちは、まったく人を寄せ付けず、餌をもらう時にさえ、人に攻撃してきました。

受け入れ病院のスタッフたちは、ネコが人の生活の中で安心して生きられるよう、根気よく話しかけ、人や動物と対面させ、少しづつ飼いネコとしての暮らしに慣らしてゆきました。

ほとんどのネコは、1ヶ月ほどですっかり落ち着き、病院内を散歩して今や看板ネコになっていたり、スタッフの家族ネコになっていたり、「ひと目惚れ」されて、一般家庭にもらわせて行ったネコもいます。

2006年3月8日
に来たオガちゃん

2005年12月27日
に来たクマ

2006年1月10日
に来たジロ

2007年7月4日
に来たジジ

2007年1月4日
に来たシーマ

2006年12月14日
に来たヰヰ

-12-

